

「イエス様はどこ？」

マタイによる福音書 28:1~10
詩篇30:6

2024年3月31日
野村 友美 師

<はじめに>

イースターおめでとうございます。

主イエス・キリストの復活を喜び祝うこの朝、私たちはあらためて聖書が伝える神様の言葉に耳をすませて、祈りをもって神様と語り、共にいてくださるイエス様に心を向けていきましょう。

<復活の朝の出来事>

安息日が終わって、週の初めの日の明け方。

今日の聖書の箇所が語る場面は、夜明けを迎えようとする薄明りの中で始まっています。

イエス様が十字架につけられ、死なれて墓に葬られたのは、金曜日の朝から夕方までの出来事でした。イスラエルの律法で決められている安息日は土曜日で、日が沈むと新しい1日が始まります。つまり、金曜日の日没から安息日は始まってしまふんです。

安息日にはどんな仕事もしてはいけない、という決まりでしたから、イエス様の埋葬は日が暮れる前に、慌ただしく行われたようです。

十字架での死から埋葬まで、イエス様の身に起こったその一部始終をじっと見つめていた女性たちがいました。イエス様の出身地ガリラヤから、ずっとイエス様に従って来て世話をしていた人々、とマタイの福音書は紹介しています。男性も女性も、たくさんの人たちがイエス様の弟子になって、ガリラヤからエルサレムまで、イエス様について来ていました。結構な大所帯ですから、食事とか洗濯とか、生活のための細かな仕事がたくさんあったでしょう。そういう日常のお世話を、この女性たちが引き受けていたようです。当時の社会では、女性には男性のような権利も、社会的な地位も、ほとんど認められていませんでした。ということは、逆に言えば、どこで何をしていても「なんだ、女か」と軽く見過ごされることが多かったはずで、ですから彼女たちには、男性の弟子たちほど厳しく監視される心配もなかったのかもしれない。イエス様の関係者だってわかったら大変だ、と他の弟子たちが怖がって隠れている中、この女性たちは大胆にも処刑場までやって来て、イエス様の死と葬りの様子を見届けました。イエス様の遺体を引き取ったアリマタヤ出身のヨセフという人は、イエス様をきれいな亜麻布に包んで墓に納めた、と福音書は伝えています。安息日になる前に、と急いで行われた埋葬では

ありましたが、決してイエス様の遺体が乱雑に扱われたわけではありませんでした。

それでも、イエス様を慕ってガリラヤから従って来た女性たちにとってはいろいろと心残りがあったんでしょう。

特に、マグダラのマリアともう一人のマリア。

この二人は、埋葬が終わってからもなかなかイエス様の墓の近くを離れられずにいました。

そして彼女たちは、安息日が終わるとさっそく、日が昇りきるのも待てずに、イエス様の墓を見に行きます。二人のマリアはそこで、予想もしなかった光景に出会いました。

墓の入り口を塞ぐ大きな石が地震で転がされて、白く輝く天使がその上に座ったんです。

イエス様の墓を見張っていた番兵たちは、恐ろしさに震え上がって動くこともできませんでした。

たぶん、彼らと同じように恐ろしくて動けなくなっていたマリアたちに、天使は「恐れることはない」と優しく話しかけます。イエス様はもうここにはおられない。前から言っておられたとおり、復活なさったのだ。さあ、昨日あなたたちが見ていた場所を確認してみなさい。

そう促してから、天使は彼女たちに重要な仕事を任せました。

「急いで行って弟子たちにこう告げなさい。

『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』

確かにあなたたちにお願ひしたからね、と天使は二人のマリアに念押ししました。

その言葉を聞いて、彼女たちは目が覚めたように動き始めます。神様がなさることの計り知れなさに恐れを感じながら、でもきっとそれ以上に大きな喜びを感じながら、二人は空っぽのお墓を離れて走って行きました。

そしてマリアたちが走り出したその先には、さらに予想外の出来事が待ち構えていたんです。復活されて、弟子たちより先にガリラヤに行かれる。

そう天使が言っていたはずのイエス様本人が、マリアたちの行く先に立っておられました。いつもの朝と同じように、「おはよう」と挨拶までして。もうびっくりするやら嬉しいやら恐ろしいやら、二人のマリアはいろんな思いに圧倒されて、言葉も出てこなかったんでしょう。

とにかく近寄って行って、イエス様の足にしがみついて、マリアたちは声もなくそこにひれ伏しました。

そんな二人にイエス様は、「恐れることはない」とさっきの天使と同じように優しく語りかけておられます。

それからイエス様は、天使の伝言を繰り返して
マリアたちに頼まれました。イエス様を見捨て
て逃げてしまった弟子たちを、それでも
「わたしの兄弟たち」と愛おしそうに呼んで。
「ガリラヤに行きなさい、そこで会おう」という
弟子たちへの約束をマリアたちに託されたんで
す。

<夜の暗闇から朝の光へ>

イエス様は復活された、という知らせ。
復活されたイエス様との再会、そして弟子たち
への約束。この驚きと喜びに満ちた出来事は、日
曜日の朝の光の中で起こされました。

夜から朝へ、暗闇から光へ、死から命へ。

神様はこの日、私たちすべての人を招かれたん
です。御子イエス様の復活と、それを証言する弟
子たちによって。

そう、私たち人間は誰もが、夜の暗闇を手探りで
歩いているようなものです。

不安、恐れ、孤独、絶望、そしていつか必ずやっ
て来る死。私たちを弱らせ、打ちのめし、時には
生きる力を奪うそういったものは、夜のように
繰り返し、私たちの日常を暗く覆います。

それでも、この世界をお造りになった神様は、夜
の暗闇をやがて必ず朝の光で照らされるお方で
す。

旧約聖書の創世記が伝える世界の創造の物語

は、神様の「光あれ」という宣言から始められて
います。そして、世界が形作られるその一日一日
が、「夕べがあり、朝があった」という言葉で結
ばれています。

繰り返す嘆きの夜の先に、それでも神様が見せ
てくださる朝の希望を詩篇の詩人はこう歌って
います。

「ひとときお怒りになっても、命を得させることを御
旨としてくださる。

泣きながら夜を過ごす人にも、喜びの歌と共に朝
を迎えさせてくださる。」

(詩篇30:6)

イエス様の十字架刑は、イエス様を取り巻く
人々の暗闇によって道筋がつけられ、実行され
ました。

「自分たちの正義や立場が脅かされる」と恐れた、
イスラエルの指導者たちの暗闇。

イエス様を敵に引き渡した、イスカリオテのユ
ダの暗闇。

責任を負わされる不安から逃げた、ローマ総督
ピラトの暗闇。

自分たちの理想とは違うメシアを受け入れられ
なかった、イスラエルの民の暗闇。

「自分たちも殺されてしまう」という恐怖に駆ら

れて、イエス様を見捨てた弟子たちの暗闇。

昔も今も変わらない、私たち人間の暗闇が、イエス様に十字架での苦しみと死をもたらしました。もちろん、「私たちすべての人を罪の束縛から救うために、神様のひとり子が身代わりとして死なれる」そのこと自体は、他でもない神様が計画されて、成し遂げられた出来事です。

それでも、イエス様を十字架に運び上げたのは、イエス様を取り巻く人々の暗闇が引き起こした行動の結果でした。

人間たちの暗闇の真ただ中で、神様は救いの計画を実現されたんです。そして、私たちすべての人の罪を背負って十字架で死なれたイエス様は、その死からよみがえられて、朝の光の中でマリアたちに「おはよう」と呼びかけられました。私たちを覆う夜の暗闇も、イエス様の復活の朝を止めることはできなかったんです。

繰り返す夜のように、不安が、恐れが、孤独が、絶望が、そして死の恐怖が、私たちの人生には何度でも襲いかかります。

ですが、私たちはもう知っています。

イエス様の復活が、私たちの世界にもたらした朝の光を。

神様がなさることの計り知れなさと、その大きな喜びを。

私たちを驚かせるほどの、神様の愛と赦しを。

イエス様の復活によって示された永遠の命の希望を、私たちはもう知っています。

救い主が私たちを、すべての人を招いておられる場所は、夜の暗闇の先、希望の朝を照らす光の中です。

だから今日、改めて私たちは一緒に、イエス様の復活の朝を見つめようではありませんか。

泣きながら夜を過ごす人にも、喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。

詩篇の詩人が歌う朝の希望を握りしめて、イエス様をこの世界にくださった神様の愛の光を掲げて、この夜の暗闇を進んでまいりましょう。

一人一人に、すべての人に、神様が約束してくださっている朝を目指して。

お祈りいたします。